

風青し、秋晴るる

県立甲南高等学校 一年

伊瀬知美央

トタン、カタン。雨が不器用に屋根を叩く。雨粒がすうーと地面に円を描いては、溶ける。何処からか、八つ時を知らせる鐘の音が聞こえる。

「もうこんな時間か」

蒼はぼんやりと空を見つめ、呟いた。長い間しゃがんでいたせいか、腰が痛い。

「ふう」

蒼は、立ち上がり、ぐっと大きく伸びをした。

蒼、十五歳。一人前の呪術師になるための修行をねえやのもとで始めて、七年ほどの月日が経過した。年を重ねるごとに厳しくなる修行にも何とか耐えて、短い月日の中で随分、多くの技が使えるようになった。今では、ちよつとした水不足くらいならば、上手く対処することが出来るようになっていく。そんな蒼の姿に安心したのが最近、ねえやはぶらりと何処かへ出掛けては帰ってくる生活をしている。今回の旅も予告なく、朝『すぐ戻る』と乱雑な文字の泳ぐ置き手紙から

始まった。自由気ままなねえやのことだ。どうせいつものように一、二週間で帰ってくるだろう。不気味な夜の山に一人で行くことに慣れてきた蒼は、呑気に考えていた。

（本当は、もうちよつとだけ虫を観察していたけど、雨が降り出したんじゃない。虫も逃げちゃうし、しょうがない。中で、本でも読むか）

地面に散りばめた観察に必要な道具をカゴに入れ、よいしよと背負った時だった。

「おーい、蒼坊。ちよつと来てくれんかい」

どんと野太い男の声がした。声の方を見ると、大柄な男が手を振っている。何処かで見たことのある顔だ。ああ、そっか。あれは椎だ。蒼は少し駆け足で、男の方へと近づいた。

「しい」

蒼は、込み上げる懐かしさを言葉にするように言った。椎は、

「おお、おつきくなったな」

と目を細めた。大きくなったも何も最後に会ったのは、いつだっただろうか。椎の家族には、ねえやに弟子入りする前、随分と世話になったものだ。今ではある程度制御することができるようになったが、幼い頃、蒼はよく物の怪を見ていた。誰もいないところで一人喋る蒼のことを村の人々は、気味悪く感じたのだろう。蒼と遊んでくれる友達も少なかった。その少ない友達の中でも、特に蒼と親しくしてくれたのが椎だった。いつも堂々としていて、かっこいい椎に対して蒼は、

親しみを覚えていたし、懂れていた。そんな椎とも呪術の修行を始めて以来、互いに忙しくて、なかなか会えなかったのだ。

「こんな山奥までわざわざ、どうしたの」

蒼が聞くと、椎は腕を組んで、眉を近づけた。

「紫乃がちよつとなあ。ま、ちよつとお前に診てもらいたいんだよ」

「紫乃って、お前の妹の」

「そうそう。なんかここ最近、おかしくてき。そうゆうのお前、得意だろ」

「ああ、まあ」

話しながら歩いているうちにとぎれとぎれだった幼い頃の記憶が、一つの紐のように繋がっていく。あの頃の紫乃は、優しく、澄んだ心の持ち主だった。女衆の間でも、煙たがれていた蒼のことを唯一、「そうにい」と呼び、仲良くしてくれた女の子だった。そんな紫乃の様子がおかしいだなんて、一体何が。しんと黙り込んだ蒼に、椎は、

「とりあえず、急ごう」

と苦い笑みを浮かべ、明るく作った声で言った。

襖を開けると、椎の親戚と思われる人々が、布団の周辺をずらりと囲んでいた。

（紫乃は、布団の中だろう。にしても、こんな大ごとになっているなんて、いったいまた何があったんだ）

次々と浮かぶ疑問を心に留めながら蒼は、布団のそばに寄

る。

「えっ」

蒼は、思わず声を上げた。布団の中で眠る少女が、あまりにも安らかな表情をしていたからだ。全体として特に変わった様子はなく、普通に眠っているように見える。これの何処がおかしいのだろうか。首を傾げて、蒼が紫乃を見つめていると椎が、だろうなどとも言おうようにうなずいた。

「見た感じ、気持ちよきそうに寝てるみたいだよなあ。でも、ここ五日間、ずうっーと寝てんだよ」

蒼は、おそろおそろ紫乃の手首に触れた。とくん、とくんと規則正しく紫乃の皮膚が揺れる。手首からは、生きている人間特有の少し湿った温かみが伝わってくる。特に体の何処かが悪いわけではなさそうだ。周りの人々は、困った顔を、蒼の方へと向けた。

「医者に見せても、分からんって言われたし、どうしようもなくてねえ」

「このまま、ずっと眠っているようじゃあ、困るわあ」

「紫乃ちゃんは、今年の主役なのに」

「主役って、紫乃は何かお役目があるんですか」

紫乃の身の周りのことが知りたくて、蒼は尋ねた。一人の女性が、衣の袖を口に当てた。

「あんた、星祭りのこと、知らないのかい」

「ええ、まあ」

幼いころ蒼は両親に村の祭りには顔を出すと、きつく戒

められていた。時折奇妙な行動をする息子に、変な噂がたつことを恐れていたのだろう。村にどんな祭りがあるのかなんて呪術師になつてから、初めて知ったものだ。

「うっそでしょう。お星さまにお祈りする祭りだよ。あんた、お願いごとを書いた灯籠、川に流したこと、ないのかい」

「はい。村から離れたところに住んでいるので」

「気まずさと恥ずかしさが入り混じつてたまらなくなつた蒼は、俯いた。呪術師として村のことは知り尽くしていると思つていたが、まだまだである実感したからだ。奥歯を噛みしめる蒼の横顔にちろりと視線を流すと、女人はまた、口を開いた。

「まあいいや。星祭りではねえ、神様に舞を捧げる人間が重要なさ。十三歳から十四歳くらいの舞を習っている村の者の中から、選ぶんだけどね、今回はお柴乃が選ばれたのさ。まあ、今年はねえ、渡り年と言つてな、ナツメノカミつていうこの辺の長みtainな神様も見に来るのさ。この神様は、一番上手に舞つたもんのある集落に特別、御利益を与えるらしくてさ。だから、お紫乃も一番上手に踊つてやるつて張り切つていたんだけどねえ」

「そうひとしきり吐いた後、女人は紫乃の髪をそつとかきわけた。瞳には、うっすらと涙が浮かんでいる。礫いかりを打つように激しい雨の音が部屋全体に広がる。蒼は己に何かを暗示するように鋭く息を吸つた。

「何とかできそうか」

「椎がいつになく真剣な表情で蒼の方を見つめた。

「とりあえず、二、三日様子を見てみようかな」

蒼は、小さくため息をついて、いつまでも眠り続けている少女の横顔を見つめた。

時は、ゆっくりと確実に刻まれていく。八つ時から降り続けた雨は遠くの村へと逃げていき、外からは湿った土のおいがする。紅葉色の薄い雲が空を泳いでいる。蒼は何時間も、見つめていた紫乃の横顔から目を離し、部屋を見渡した。

「年季の入つた文机には、何冊かの書物がきちんと並べられている。ずどーんと太い杉の大黒柱には、椎と背比べした跡がある。うだるような暑さで寝苦しくないようにと、紫乃のことを気遣つてか、枕元に置かれた氷がひんやりとした冷気を放つている。きっと紫乃は、周りの人々に大事にされてきたのだろう。紫乃に対しての様々な人物の心遣いを感じ取り、蒼はいたたまれない思いでいっぱいになった。

「紫乃」

「いてもたつてもいらなくなり蒼は、茜色に染まる少女の横顔へと、語りかけた。

「こんな風になつて再会したの、俺すごく寂しいんだけど。

「お前、一体どうしちゃったんだよ」

二人きりの部屋を蒼の声だけが寂しく包む。

「お前の家族だつてさ、お前のこと心配してるよ。早く戻つて来いよ」

返事はない。それでも蒼は、紫乃の脳内へと伝えるように

語り続ける。

「俺さ、決めたんだ」

トントンと風が障子を打つ。

「みんなの役に立つ呪術師になるって」

蒼はもう一度、紫乃の横顔を見つめた。熱くてかたい何か
が全身に押し寄せてくる。蒼は手の平の力をゆっくりとほど
き、紫乃の方へと寄せた。

「お前のこと、何があっても助けるからさ」

体温を分けてあげるように強く、紫乃の手を蒼は握る。自
分よりも一回りほど小さな手にきゅつと胸が締め付けられる。

蒼は、キツと瞳を閉じた。蒼のからだから、音が消えていく。

「待っててよ」

しんと張りつめた空気の中で蒼は、紫乃へとささやいた。
時は何があるうと流れていくことをやめない。このままであ
れば、どういった状態であろうと、紫乃の命は必ず、衰えて
いくだろう。いや、もう既に終わりへと近づいているのかも
しれない。それでも蒼は、紫乃を、蒼の心のひとかけらであ
るこの家族を何があっても助け出したかった。

キー、キー。塗り板をひっかき乱したような不快感の残る
高音が蒼の鼓膜にねぶりつく。頭の中はまだ、眠りを求めて
いる。しかし手足は水中にいるときのように軽い。矛盾した
二つの感覚を奇妙に思った蒼は、頭の疲労を無理やり引き払
い、体を起こした。

紫乃の部屋ではないことは明らかだ。ちょっとした力で崩
れそうな脆い空間、足元をよぎる生ぬるい水の刺激、居心地
悪くしがみつく衣の袖。夢のように思わせるも、妙に現実味
のある感覚。きつとここは、己の呪力の源である境界だろう。

「そーう、そーう」

遠くから誰かが呼ぶ声があった。敵をめがけて射った矢のよ
うに凜と整えられた声。声がするといふことはきつと、自分
の境界に誰かが侵入してきたのだろう。でも、境界に入り込
むことの出来る人なんてごくわずかだ。そもそもこれは誰の
声だ。声の主を探そうと、辺りをきよろきよろと見まわして
いると、べしんと頭を叩かれた。頭の中が揺れる。

「まったくもう、なーにをぼんやりしているんだい」

また同じ声があった。多くの疑問が巡っていた先ほどは誰だ
か分からなかったが、脳内が整理されてきた今、蒼には声の
主が誰か、はつきりと分かる。それにこの一切手加減しない
はたき方、間違えない。この声、まさか。

「ねえや」

蒼が少し語尾を上げて、空間へと言葉を投げる。その時だ
った。

パチパチと薄桃色の花がひとつふたつ、散っては水面に円
を描く。花卉はすいーつと水面に淡い光を反射させて、滑り
込む。幾つもの光が交差し、だんだんと形づくる。ぼわん、
何かが一気に吹きあがる音がした。雲のように巨大な霧が空
間いっぱい広がる。

「うわっ」

蒼はおもわず声を上げた。雷に撃たれたような衝撃が全身を揺らす。倒れまいと、必死にしがみついていると、靄はしゆわーと空気の中に溶けていく。途端、景色がはっきりとしてくる。蒼は、目の前で両手を腰においた女が何者かを一目で理解した。間違いない、ねえやだ。

「ねえ」

懐かしさを噛みしめるようにもう一度言おうとすると再び、べしんと頭をはたかれた。正体はつきりと分かった今、頭を揺るがす痛みが何だか懐かしい。

「まったくもお、あんたときたら、自分の恩師の声さえもちやんと分からないなんてねえ」

「ねえや、わざわざこんなとこにやって来て、何かあつ、」

「だいたいあんたは、わしに対しての恩が浅すぎるんだよ。あんなに愛を込めて育ててやっているのにも」

「ねえや」

いつまでも止まる気配のないねえやの説教を蒼は、少し強い口調で止めた。ほおーおまえさん、わしにはむかいおって、いい度胸しておるのお、じとーとした目からでも伝わるねえやの心境に蒼は、つららを首筋に当てられた時のようにひやりとする。それでも負けてたまるか、蒼はぐっと目頭に力を込める。

「ねえや、ここ、俺の境界でしょ。ねえやがいることの出来る時間には限りがあるんだよ。俺も忙しいんだし、早く要件

言って。ほおら、体、透けてきてる」

空間を映す鏡のようになっていく恩師の姿に、蒼は盛大にため息をついた。だが蒼の心配をよそにねえやは、

「なあにこのくらい、大丈夫さ」

と言って、にいつと口角を上げた。絶対違う、怪しい。むつとした目で見ると、ねえやが人差し指を立てた。

「わしが忙しい中、わっざわざあんたのとこに来たのは、あんたを助けてやろうと思っただけからさ」

ようやく本題を切り出したねえやがたくましく見える。蒼は、ぴしっと背筋を伸ばした。

「いいかい、蒼。しのだっけ、お前が今診ている女は。あの子はね、なんの物の怪にも憑りつかれちゃあいないのさ」

ほつとした安堵感が蒼を温める。よかった、まだ紫乃は生きているんだ。安心しきった顔をする蒼を横目にねえやの話は続く。

「ちよつくら魂が旅にでるだけさ。心配はいらないよ」

ねえやの顔から笑みが抜ける。糸を張ったような緊張が空間を包む。この話にまだ、続きがあることは分かっている。

でも、続きを知ってしまうことが怖くてたまらない。何も言うことが出来ず、ねえやを見ていると、ねえやがゆっくりと口を開いた。

「星祭りの夜まではね」

ぞわぞわと背筋を虫が這い上がってくるような嫌な感触がする。ほしまつり、嘘だろ。あとちよつとじゃないか、それ

を超えたら紫乃は一体。体が金縛りにあったように冷たく、動かない。

「いいかい、蒼。星祭りまでまだ時間は、たっぷりある。焦っちゃだめさ。じっくり考えて動くんだよ」

傷口に塩を塗られたように痛かった。かろうじて動く頭を小さく、蒼は縦に振った。その時だった。ゴーゴー。獣の唸り声のような音を立てて、風が吹く。花の蜜と土の混ざり合ったどろどろとした液体が衣の上まで這い上がってくる。「しまった」ねえやの呟く声があった。

「まあ、とにかく周りをよおしくみるのさ。必ず手掛かりはどっかに落ちているからね」

ぼりん。空間に亀裂の入る音がした。刹那、空間を色とりどりの花吹雪が押しつぶす。ねえやは力いっぱい蒼を遠くへと押しやった。ねえやの輪郭がぼやけていく。

「それと、わたしが修行の中で叩きこんだ話をしっかりと脳みそに起こし上げとくんだよ」

ねえやの声に応じようと蒼は、風にもまれながらも手を振る。ひゅー、風がまた吹いた。ねえやが空間へと溶けていく。蒼は、無数の花びらに乗せられて、桜色の洞窟を駆け抜けた。

はっと蒼は目をひらいた。仮眠をとろうと横になったが、随分と長い時が流れていたようだ。夕焼け空は姿を消して、青白い月明かりが障子戸の隙間から、一本道をつくっている。動けば、ギシギシと歪む板が、蒼に起きろとも言っている

ようで痛い。昼間の暑さが嘘のように、ひんやりとした風が肌を撫でる。家の者は皆眠りについたのか、虫の音だけがひっそりと辺りを漂っている。夜風の湿った香りが蒼を我に返す。そうだ、いけない。

「しの、は」

蒼は、紫乃の観察をしようと体を起こした。長い時間正座していた時のように足に力が入らない。それでも何とか体を上げようと踏ん張る。心地よさそうに眠る紫乃が目に入る。次の瞬間だった。

「ーっふ」

蒼は、瞳をかつと見開いた。紫乃の周りをヒトノセのものとは信じ難い、いやあきらかにヒトノセのものでない景色が取り巻いていたからだ。

夜明け前の海のような色をした光が紫乃の方から淡く、放たれている。敷布団の周りに散らばっている貝殻は、染め具をこぼした後のように鮮やかな色が遊ばれて毒々しい。足元からは、あまたの泡が空へと跳ねては弾けてを繰り返している。幻でも見ているのだろうか。奇妙な光景を目にした蒼は思い切り、己の腕をつねる。ピリツと爪の硬さが腕をいじめる。やはり、幻ではないのか。蒼は目をごしごとこする。

こんなことが起きるなんて思いもしなかった。これは一体何なんだ。ねえやはこの状況をどう乗り切れと。蒼はきつ、ともう一度、紫乃を見る。昼間とは打って変わり、得体のしれない光を放つ紫乃は、ヒトノセのものとは思えない。もし

かしたら、悪い物の怪の一種が気配を消して紫乃に、憑りついていたのだろうか。いや、しかしねえやの見立てによると、そんなわけではないらしい。確かに、誰かを苦しめる物の怪特有の獣のような匂いは、紫乃からはしていない。むしろ蜜蜂を誘惑して離さない花のような甘い香りが、紫乃からはかすかに漂っている。呪いにかかった人にだけする羽虫の唸り声もしない。じゃあ、なぜ。改めて蒼が紫乃に視覚を集中させたときのことだった。

(これは)

蒼は、声にできない感情に引つ張られて、後すぎりした。紫乃の体にちっぽけで半透明な魚の大群がまとわりついているのが、目に入ったからだ。

(さかな、なんでこんなところに)

蒼が、目を見開いているのを横目に魚たちは、せつせと紫乃の元へと集まっては、天へ天へと言わんばかりに、うろこをパタパタと漕ぐ。

ゆつくりと魚に手を伸ばす。壊れぬように優しく、力は抜いて。

魚が手の中で跳ねる。尾びれは水気を多く含んでいて、寒天のような触り心地だ。蒼は、魚をよく観察しようと指の腹にぐつと力を込めた、その時だ。

ぐにやり。魚が映す障子戸が歪む。魚が力の方へと曲がっていく。しまった、蒼は慌てて指を魚から離そうとする。だがもう遅い。

「ああっ」

魚が空中へと細かく分かれる。蒼の手のひらに雨が降る。気が付いた時、魚はぬるい水へと変化していた。

(やっぱり、こいつらは力に弱いのか。気を付けて触らなければ)

小さな水たまりの出来た手のひらを見つめ、蒼はがくんと肩を落とした。まあ、潰れてしまったものはしょうがない。他のものを観察するか。蒼が再び、紫乃に目を向けた時のことだった。

ぱつん。何かが弾ける音がした。先程までの弱くて脆い泡ではない、人魚の卵が割れたような大きな音。

(――)

蒼は声にならない叫びをあげて、音の方を見る。音の元となったのは、紫乃の足元をさまよっていた魚たち。激しい爆発音を立てて散った魚たちの残骸もまた、水になり、地面へと旅立つ。ぽちゃん。水が音を奏でる。藤の花が舞う川のような色をした光が紫乃を包み込む。同時に蒼を、朝焼け色の魚が一斉に包む。海の中に飛び込んだ時のように外と自分に、くつきりとした隔たりができる。なんだこれは、一体何が。突然の環境の変貌に蒼は、じたばたと体をくねらせる。しかし、そんな蒼の抵抗も虚しく、こうしている間にも魚は、一つの水の泡になっていく。ほんのりと柔らかな花の香りがする。

途端、蒼の体を春の朝の心地よさが満たす。うららかな春

の朝に、夢の中に誘い込まれるようにもやりと、頭の中は曇っていく。瞼に重しが置かれ、体が気だるくなっていく。水面のうねりが子守唄となり、蒼の眠気を催促する。パタパタ、魚が空を漕ぐ。昼から引き離された足を見たことを最後に蒼はまた、深い眠りについた。

トントカトントカ。シャーンシャン。華やかに彩られた鈴と太鼓の音が鼓膜を叩く。ぴゅー、遠くから聞こえる笛の音は、太鼓と鈴のにぎやかさを際立たせるように、愉快に風と踊る。頬を撫でる風は、海に浸したような潮の香りがする。誰かの肌のぬくもりが自分と地面との間に敷かれた衣ごしに伝わってくる。天の川みたいだ、ぼんやりと雲がかかった視界の中で、蒼は思った。

「おっ。気が付いたか」

ひよろりとした、聞きなれない声があった。声の方を見ると、絵筆で書いたように細かい目が二つ、蒼を覗き込んでいた。ひゅっ。旅をしていた警戒心が呼び戻される。蒼は、体を起こした。

「すまんな、驚かせて」

男はただでさえ細い目を線のようにして笑った。なんだ、この男は。悪い奴ではなさそうだが、まだ油断はできない。よく見極めねば。それに一体ここは、何処なんだ。ぐるぐるとめぐる黒い気持ち顔に出ているのだろうか。男は口を開いた。

「ここはカミノセ、神様の住むところさ。お前さんはこの辺に倒れていたから、俺が拾ったのさ」

にたあと男が口角を上げる。

「お前さん、ヒトノセのもんだろ。そんな怖い顔すんなって。俺だっておんなじ、ヒトノセのもんさ。ついてこいよ。この辺を案内してやるよ」

男が手を伸ばす。悪い奴という証拠は何一つない。実際男からは人を騙そうとする卑しい気配はない。しかし、よい奴だという証拠もない。ぎゅつとひそめていた眉はそのままにして、蒼は考える。男の言っていることが正しいかは分からない。だが、悪い奴であれば道端に倒れていた蒼のことを助けないだろう。それに、人から与えられた恩を仇で返すのは気が引ける。蒼はしぶしぶ男の手を取った。

ほんのりと光を秘めた提灯が村を彩る。ともし火で照らされた村は、蛍の行きかう夏の川のようにだ。姿形の異なる神々の歩く街並みが、蒼を異国にいるような不思議な気持ちへと誘い込む。

「それにしても最近、ヒトノセのもんがよく迷い込んでくるな」

男は腕を組み、辺りを見渡して言った。男の動きにつられて蒼も、周りをきよろきよろとする。確かにその通りなのかもしれない。修行の中で時折、神々の姿を目にするも、人の形をしたものは見たことがない。しかし今、蒼のいるカミノセには、人の姿をしたものがちらほらと見受けられる。男が